

アメリカSGI

2009年「教学レビュー」教材と要点

「教学レビュー」の実施大綱

参加資格 役職、信仰歴にかかわらずなく、全アメリカSGIメンバーが参加。

実施日程 10月1日から31日までに実施。確実な日程、時間は各方面、ゾーン、総合本部で決定されますので、地元組織リーダーに確認してください。

活動のポイント 「教学レビュー」は10月度の定例教学行事に替わるものとして実施されます。できるだけ地区単位で行い、円滑な運営のために支部、本部等のリーダーらが出席し、担当に当たります。

問題用紙 日本語「教学レビュー」問題は、ワールド・トリビューン9月11日号に添付されますので、それを各自持参します。(英文は同日付本紙に掲載)問題は正誤選択式、短い記述式となっています。

活動スケジュール 勤行(必要に応じて)、問題に解答(40分)、自己採点及びディスカッション(40分)。

事前の留意点 実施会場、学習の進め方、運営・進行責任者、活動プランなどについて話し合うこと。参加者はワールド・トリビューン9月11日付け添付の問題用紙のほか筆記用具を各自持参するように徹底すること。教学レビューに対して余り神経質にならないように。仏法研鑽を楽しむことがポイントです。

教材一覧

10月に実施される「教学レビュー」の教材は次の通りです。

- <第1部> 基礎仏法用語（本紙日本語版「座談会の御書」から）
「信行学」——「諸法実相抄」から（日本語版09年1月1日付）
「三証」——「三三歳祈雨事」から（日本語版09年2月6日付）
「相対的幸福と絶対的幸福」——「衆生所遊樂御書」から（日本語版09年3月6日付）
「第六天の魔王」——「三沢抄」から（日本語版09年5月1日付）
- <第2部> 日蓮大聖人の御生涯
パート1 御聖誕・出家・遊学、立宗宣言、立正安国論の提出と法難、竜の口の法難と発迹顕本（大白蓮華07年10月号74頁～77頁）
パート2 佐渡流罪、身延入山、熱原の法難と大御本尊御建立、日興上人への付属と御入滅（大白蓮華07年10月号77頁～80頁）
- <第3部> 池田SGI会長講義「希望の経典『御書』に学ぶ」
第5回 「顕仏未来記」“世界広宣流布”（日本語版08年11月7日大白蓮華08年1月号）から「未来記——後世の門下への遺命」と「末法に生まれ合わせた喜び」の項のみ。
第6回 「妙一尼御前御消息」“冬は必ず春となる”（日本語版08年12月5日付 大白蓮華08年2月号）から「試練の冬が勝利の花を」の項のみ。
第10回 「三沢抄」“一人立つ勇気の継承”（日本語版09年4月3日付 大白蓮華08年7月号）から「元品の無明が第六天の魔王に」の項のみ。
- <第4部> 創価スピリット
「創価学会の歴史」（大白蓮華07年10月号107頁～115頁）
「日顕宗を破す」（大白蓮華07年10月号116頁～118頁）

【第1部 基礎仏法用語】（座談会の御書から）

1. 信行学

＜諸法実相抄＞

行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし（御書 1361 鈔）

本抄は、文永10年（1273年）5月17日、日蓮大聖人が52歳の時に佐渡の一谷で著され、最蓮房日浄に送られた御抄です。

この御文は、「信・行・学」という仏法実践の根本について述べられている本抄の結論部分にあたります。

まず、御本尊への強盛な信心を根幹として、「行学の二道」に励んでいくことが肝要であると仰せです。「行」とは自行・化他にわたって南無妙法蓮華經の題目を唱えていくことであり、「学」とは、大聖人の御書を根本に仏法の法理を学んでいくことです。

「行学たへなば仏法はあるべからず」と仰せのように、いかに外形が立派な寺院などの建物があつたとしても、行学の実践がないところには、もはや仏法は存在していないのです。

また「我もいたし人をも教化候へ」と仰せのとおり、行の実践は自行だけではなく、化他にわたるものでなければなりません。化他を行わないのは、一切衆生を救おうとする仏の心に背くからです。

そして、「行学は信心よりをこるべく候」と仰せです。真の信心は行学の実践に表れるのであり、心で信じていれば行学を行わなくてもよいというのは、間違いです。さらに「力あらば一文一句なりとも語らせ給うべし」と仰せのように、自分の力の及ぶ限り、少しでも仏法を語っていこうと努力していくことが大切であり、大聖人のお心にかなった実践なのです。

ですから、大聖人の教え通り、どんなことがあつても信行学を貫き、広宣流布に進んでいくことが真の仏法者のあり方です。それこそ日蓮仏法の真髓なのです。SGIは、各人の成長と幸福のため、そして広宣流布のために手を携え、激励し合つて前進する団体であり、まさに法華經の精神そのものと言えます。

池田SGI会長は、この御文についてこう指導しています。

「仏法は、たんなる観念の世界ではない。弘教、そして教学の研鑽という具体的な実践なくして、仏法はありえないのである。(中略)要するに、あくまでも信心が根本である。信心が立派であれば、おのずから行学も立派になっていく。行学が立派であれば、それは信心も立派な証拠である。また、それが信心即生活となり、生活も立派になっていく。近年、教学がありそうに見えても、墮落し、退転していった幹部がいた。それは結局、信心がなかった証拠であり、ゆえに教学もなかった証拠である。私どもは、どこまでも信心のための教学であり、行学でなければならぬ」(「輝きの人間世紀へ」157頁)

(本紙09年1月1日付)

2. 三証

<三三蔵祈雨事>

日蓮仏法をこころみるに道理と証文とははずぎず、又道理証文よりも現証にははずぎず(御書1468頁)

本抄は、建治元年(1275年)6月、身延の地でしたためられ、駿河国富士郡西山に住んでいた門下の西山入道に与えられた御書です。この一節では、「三証」の法理を示され、なかでも現証こそが仏法の正邪を判定する最終的な基準であることを教えられています。

三証とは「文証」「理証」「現証」の三つをいいます。「文証」とは、その宗派の教義や主張が経文、仏典のうえで裏付けをもっているかどうかということです。

日蓮大聖人は「経文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり」(御書482頁)と、経文上の明確な根拠のある教義を用いるべきであり、経典によらない教えを用いてはならないと戒められています。

文証に基づかない教義は所詮、自分勝手な己義(自義)であるからです。また大聖人は、経文の他に何か特別な秘伝・真理があると主張する者に対して「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」(御書482頁)との伝教大師の言葉を引用され、仏説に基づかない「口伝」「相伝」の類を信じてはならないとされています。

次に「理証」とは、その宗派の教義や主張が道理にかなっているかどうかということです。

「仏法と申すは道理なり」(御書1169頁)と仰せのように、仏法はあくまで道理にかなった教えでなければならず、道理に外れた主張は用いてはならない

のです。

大聖人は「開目抄」で「文無く義無きは信受すべからず」（御書 219 鈔）との天台大師の言葉を引かれ、文証も理証もない教義を信じてはならないと戒められています。

「現証」とは、その宗派の教義や主張通りの結果が、生活や社会に現れるかどうかということです。

宗教とは本来、単に観念的・内面的なものではなく、善かれ悪しかれ、人々の生活・人生や、社会の在り方に重大な影響を及ぼすものです。その現実の結果が、宗教の勝劣浅深を判断していく基準となります。

この一節で仰せのように、文証、理証以上に現証が重要であるとされています。それは本来、現実の人間を苦悩から救うため、つまり成仏が仏法の目的であるからです。

大聖人の仏法は、理論のうえでも現実のうえでも、万人が納得できる客観的・普遍的な根拠をもつ宗教なのです。大聖人御自身の振舞いや御書、また池田 S G I 会長の多くの著作や平和への功績、そして世界幾百万の S G I メンバーによる功德の実証は、誰人も否定できない文証・理証であり、妙法の功力を示す現証に他なりません。（「教学の基礎」223 鈔「三証」から）

（本紙 09 年 2 月 6 日付）

3. 相対的幸福と絶対的幸福

<衆生所遊樂御書>

一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に云く「衆生所遊樂」云云、此の文・あに自受法樂にあらずや（御書 1143 鈔）

幸福というと、十分にお金があり、学歴もあり、いい仕事に就き、健康で、器量もよく、といった物質的、外観的な面を考えてしまいがちです。もしあるものが得られれば自分は幸せだと思うかもしれませんが。しかし、一つ、また一つと手に入れたとしても、それが幸福を保証するとは限りません。

信心の目的は、いかなる時にあっても感謝の思いに満ち、勇敢に胸を張って、幸せに生きていくためです。これが、本抄で日蓮大聖人が弟子の四条金吾に訴えたいメッセージです。当時、金吾は同僚から憎まれ、主君の江間氏からも冷遇されて、大変に苦しい日々を送っていました。大聖人は、その金吾の苦衷を深く汲み取られ、渾身の激励をされています。

大聖人は、苦しみは人生の一部であるとしながらも、妙法を持ち、弘教する努力のなかに、「自受法楽」という偉大な境涯を得ることを教えられています。

また大聖人は、法華経寿量品の「衆生所遊樂」の文を引かれています。これは、崩れることのない深い生命からの歓喜と充実感に満ちた、いわば仏界の生命を表した言葉です。戸田城聖第2代会長は、それを「絶対的幸福」と表現し、誰もが自己の生命の内にこの偉大な境涯を築き上げる努力をすべきであると強調しました。

つまり、幸福とは外界の状況や他の人によって決まるのではなく、ひとえに自分自身の努力と自覚によるのであると言われたのです。ある欲望を満たすことによって得られる「相対的幸福」は、妙法の実践から達成される深い生命境涯とは到底比べることはできません。「相対的幸福」がその時限りの喜びであるのに対し、「絶対的幸福」は永遠に崩れることのない歓喜なのです。

池田 SGI 会長はこう述べています。「他人や環境に引きずられて幸・不幸を感じる生き方は、法華経ではありません。真実の幸福境涯ではありません。自分の悩みを、人のせいにし、環境のせいにする。そういう『くせ』を直せば、そこから大きく境涯が開くのです」（永遠の経典「御書」に学ぶ③144 頁）

SGI の活動をとおり、大聖人の仏法を正しく実践、弘教するなかで、私たちはどんな大変な問題をも克服するための智慧、勇気、希望、歓喜を顕現することができ、環境のいかんに関わらず、「現世安穩」の境涯を確立していくのです。苦悩も喜びもともに自己の存在意義を深く理解するために必要なのです。何があっても題目を唱えつつ、自他の幸せのために前進していく時、一生成仏への偉大な因を積み重ねていくことは間違いありません。

（本紙 09 年 3 月 6 日付）

4. 第六天の魔王

<三沢抄>

生死をいで仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし（御書 1487 頁）

本抄は、駿河国富士方面にある三沢に領地を持っていた侍信徒、三沢小次郎に送られたお手紙で、幕府からの迫害があっても決して「第六天の魔王」に負けてはならないと決意をうながされています。妙法を修行する者には、必ず「三障四魔」という成仏を妨げる働きが現われてきます。三障四魔のうちでも「第六天の魔王」が最も強力であるとされます。「第六天の魔王」とは、別名、「他

化自在天」とも言われます。したがって、第六天の魔王とは、自分の思うがままに人々を自在に操ろうとする、権力者の生命に巢食う破壊的な傾向性であるとも言えます。

池田SGI会長はこう述べています。

「この虜になってしまった徒輩は、民衆が正しき哲理に目覚め、自立することを恐れる。人びとのために尽くす『正義の人』を嫉妬し、憎悪する。讒言（ざんげん）・讒訴（ざんそ）などを用いて迫害する」（7/12/01 聖教新聞）

つまり第六天の魔王とは、人間のもつ傲慢さ、自己中心主義、他者への嫉妬などの醜い生命の傾向性を表したもののなのです。

大聖人は「元品の無明は第六天の魔王と顕われたり」（御書 997 頁）と仰せです。誰人の生命にも、仏界の生命である「元品の法性」が存在しますが、それを信じられないのも凡夫の常です。この「元品の法性」への不信を「元品の無明」と呼ぶのです。この無明こそ、あらゆる人間の苦悩の根源なのです。

しかし、いかに元品の無明が強くても、その本質は無知であるがゆえに、智慧をもって克服することができます。自己の元品の法性を信じて南無妙法蓮華経と唱えていく時に、この智慧を涌現することができるのです。大聖人が「元品の無明を対治する利剣は信の一字なり」（御書 751 頁）と仰せの通りです。

抵抗を克服することなくして進歩はありません。人間革命の過程では、当然、困難や障害に挑戦し、乗り越えていくことが不可欠となります。その信心根本の戦いを通して、私たちは大きく成長していくことができるのです。それを大聖人は「強敵を伏して始て力士をしる」（御書 957 頁）と仰せになっています。生命内奥に巢食う魔の働きを対治することは、仏法の根本命題であったと言えます。

また、「三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり」（御書 1091 頁）とも仰せです。魔に負けてしまえば、内奥の無知に支配されることになり、自他とも生命の偉大な可能性、成仏の可能性を否定してしまうこととなります。ですから大聖人は、妙法への信こそ最も大事であり、第六天の魔王に勝利していく直道であると教えられているのです。

池田SGI会長は「三沢抄講義」（大白蓮華 08年7月号）でこのように述べています。

「私たちは、ここに第六天の魔王を打ち破る信心の真髓を拝することができます。それは『一人立つ』信心です。（中略）その『勝ち抜く心』『少しもたゆまぬ心』こそが、そのまま魔軍に対する勝利を決定づけるのです」

困難や障害にぶつかった時に、退いて第六天の魔王を喜ばすのではなく、敢然と力強い唱題で智慧と勇気を奮い立たせ、明るく行動を起こしていくことが肝心なのです。

(本紙 09 年 5 月 1 日付)

【第 2 部 日蓮大聖人の御生涯】

日蓮大聖人の御生涯——それは、全人類の不幸を根絶し、すべての人々に仏の境涯を開かせたいとの誓願と慈悲に貫かれた妙法弘通の御一生でした。そして、民衆の幸福を阻む一切の悪を責め抜き、大難につぐ大難の御生涯でもありました。

<パート 1>

(1) 御聖誕・出家・遊学

日蓮大聖人は、貞応元年（1222 年）2 月 16 日、安房国長狭郡東条郷の片海（現在の千葉県鴨川市小湊）という漁村で誕生されました。漁業で生計を立てる庶民階層の出身でした。

12 歳で安房国の清澄寺に入って、いわば初等教育を受けられました。

そのころ大聖人は「日本第一の智者となし給へ」（御書 888 鈔）との願いを立てられました。父母、そして民衆を救うために、生死の根本的な苦しみを乗り越える仏法の智慧を体得しようとされたのです。そこで大聖人は、仏法を究めるために出家を決意します。16 歳の時、清澄寺の道善房を師匠として得度しました。

このころ、「明星の如くなる智慧の宝珠」（同鈔）を得られたと述べられています。これは、全仏法の根底と言うべき「妙法」についての智慧といえます。

大聖人は鎌倉・京都・奈良等の各地の諸大寺を巡る遊学を開始し、一切経を精読するとともに、各宗派の教義の本質を検証していかれました。その結果として、法華経こそが仏教のすべての経典のなかで最も勝れた経典であり、御自身が悟った妙法は法華経の肝要の法である南無妙法蓮華経であることを確認されました。そしてこの南無妙法蓮華経を末法の人々を救う法として弘める使命を自覚されました。（「末法」とは、釈尊の仏法が救済の力を失う時代のことで、当時の一般の説では、釈尊が入滅してから 2000 年以後とされます）。

(2) 立宗宣言

遊学によって妙法弘通の使命とその方途を確認された大聖人は、大難が起こることを覚

悟のうえで、妙法弘通の実践に踏み出すことを決意されました。

そして、**建長 5 年 (1253 年) 4 月 28 日**の「午の時」(正午ごろ)、清澄寺で、念仏などを破折するとともに、**南無妙法蓮華經**の題目を高らかに唱えて末法の民衆を救済する唯一の正法を宣言されました。これが「**立宗宣言**」です。立宗とは宗旨(肝要の教義)を立てることです。御年 32 歳でした。この時、みずから「**日蓮**」と名乗られました。

この立宗宣言の際に念仏宗の独善的な教義を厳しく批判した大聖人に対し、地頭・**東条景信**は念仏の強信者であったために激しく憤りました。そして、大聖人の身に危害を加えようとしたが、大聖人は無事、その難を免れました。

鎌倉に出られた大聖人は名越の松葉ヶ谷に草庵を構えて、弘教を開始されました。当時、鎌倉に広まって人々に悪影響を与えていた念仏宗や禅宗の誤りを破折しながら、**南無妙法蓮華經**の題目を唱え、弘められました。

その弘教により、**富木常忍・四条金吾・池上宗仲**らが入信しました。

(3) 立正安国論の提出と法難

大聖人が鎌倉での弘教を開始された当時、毎年のように、異常気象や大地震等の天変地異が相次ぎ、大飢饉・火災・疫病(伝染病)などが続発していました。

特に、正嘉元年(1257年)8月に鎌倉地方を襲った大地震は、鎌倉中の主な建物をことごとく倒壊させる大被害をもたらしました。

大聖人はこの地震を機に、世の不幸の根本原因を明らかにし、それを根絶する道を世に示すため、駿河国(現在の静岡県中央部)にある岩本実相寺で一切教を閲読されました。その時、日興上人が大聖人の弟子となっています。

そして大聖人は**立正安国論**を著され、**文応元年 (1260 年) 7 月 16 日**、時の実質的な最高権力者であった**北条時頼**に提出されました。これが大聖人による最初の**国主諫暁**です。

立正安国論では、天変地異が続いている原因は国中の人々が正法に背いて邪法を信じていることにあり、その元凶は法然が説き始めた念仏にあると指摘されています。

そして、人々が悪法への帰依を止めて正法を信受するならば平和楽土が現出するが、悪法への帰依を続けるならば経文に説かれている三災七難等の種々の災難のうち、まだ起こっていない**自界叛逆難**(内乱)と**他国侵逼難**(他国からの侵略)の二つの災難が起こるであろうと警告し、速やかに正法に帰依するよう諫められました。(三災七難とは、穀貴(飢饉のこと)・兵革(戦争のこと)・疫病(伝染病がはやること)の3種の災いと、星宿変怪難(星の運行が乱れること)・非時風雨難(季節はずれの風雨の災害が起こること)などの7種の難をいいます)。

しかし、幕府要人は、大聖人の至誠の諫暁を無視しました。それだけでなく、念仏者た

ちは幕府要人の内々の承認のもとに大聖人への迫害を図ってきたのです。

文応元年（1260年）8月27日の夜、念仏者たちが、大聖人を亡き者にしようと松葉ヶ谷の草庵を襲いました（松葉ヶ谷の法難）。

幸い、この時は大聖人は難を逃れ、一時、鎌倉を離れることになりました。

翌・弘長元年（1261年）5月12日、幕府は鎌倉に戻られた大聖人を捕らえて、伊豆の伊東へ流罪に処しました（伊豆流罪）。

弘長3年（1263年）2月、伊豆流罪を赦免（罪を許されること）されて鎌倉に帰られた大聖人は、翌年、病気の母を見舞いに郷里の安房方面に赴かれます。

文永元年（1264年）11月11日、大聖人の一行は、天津の工藤吉隆邸へ向かう途中、地頭・東条景信の軍勢に襲撃されました。この時の戦闘によって、門下の鏡忍房と工藤吉隆が死亡しただけでなく、大聖人も額に傷を負い、左の手を折られました（小松原の法難）。

（4）竜の口の法難と発迹頭本

文永5年（1268年）、蒙古からの国書が鎌倉に到着しました。そこには、蒙古の求めに応じなければ、兵を用いるとの意が示されていました。立正安国論で予言した他国侵逼難が現実のものとなってきたのです。

そこで大聖人は時の執権・北条時宗をはじめとする幕府要人や鎌倉諸大寺の僧たち、あわせて11カ所に対して書状（十一通御書）を送り、公の場での対決を迫りました。

しかし、幕府も諸宗も、大聖人の働きかけを黙殺しました。それどころか、幕府は大聖人の教団を危険視し、その弾圧を検討していたのです。

この頃、蒙古調伏の祈禱を行う真言宗が影響力を増してきました。また、真言律宗の極楽寺良観が幕府と結び付いて大きな力を持ちはじめました。大聖人は、民衆と社会に悪影響を与えるこれら諸宗に対しても、一步も退かず破折を開始します。

文永8年（1271年）に大旱魃が起こった時、極楽寺良観が、祈雨（雨乞い）の法を修することになりました。そのことを聞かれた大聖人は、良観に申し入れをされました。

それは、もし良観が7日のうちに雨を降らせたならば、大聖人が良観の弟子となり、もし雨が降らなければ、良観が法華経に帰伏せよ、というものでした。

その結果は、良観の祈雨の法が行われた最初の7日間、雨は一滴も降らず、良観はさらに7日の日延べを申し入れて祈りましたが、それでも雨は降らないばかりか、暴風が吹くというありさまで、良観の大敗北となりました。

しかし、良観はみずからの敗北を素直に認めず、大聖人に対する恨みをさらにつのらせ、配下の念仏僧の名で大聖人を訴えたり、幕府要人やその夫人たちに働きかけて、権力による弾圧を企てました。

良観は、当時の人々から仏法を極めた高僧として崇められていました。しかし、実際には権力と結託して、私欲を貪っていたのです。

9月10日、大聖人は幕府から呼び出されて、侍所の所司（侍所は軍事・警察を担当する役所。所司は次官のこと、長官は執権が兼務）である平左衛門尉頼綱の尋問を受けました。

この時、大聖人は平左衛門尉に対して仏法の法理のうえから、国を安んじていく一国の指導者のあるべき姿を説いて諫められました。

2日後の文永8年（1271年）9月12日、平左衛門尉が武装した兵士を率いて松葉ヶ谷の草庵を襲い、大聖人は謀叛人のような扱いを受けて捕らえられました。この時、大聖人は、平左衛門尉に向かって“日本の柱”である大聖人を迫害するならば、必ず自界叛逆・他国侵逼の二難が起こると述べて、強く諫暁されました（第2回の国主諫暁）。

大聖人は、何も取り調べがないまま、夜半に鎌倉のはずれにある竜の口に連行されました。平左衛門尉らが、内々で大聖人を斬首することを謀っていたのです。しかし、まさに刑が執行されようとしたそのとき、突然、江ノ島の方から“まり”のような大きな光ものが夜空を北西の方向へと走りました。兵士たちはこれに怖じ恐れて、刑の執行は不可能となりました（竜の口の法難）。

この法難は、大聖人御自身の一代の弘教のうえで極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難を勝ち越えた時に、凡夫の迹（仮の姿）を開いて、御胸中に久遠元初自受用報身如来という本地（本来の境地）を顕されたのです。これを「発迹顕本」（迹を開いて本を顕す）といいます。

この発迹顕本以後、大聖人は末法の御本仏としてのお振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として尊敬し、帰依していくべき曼荼羅御本尊を御図顕されていきました。

<パート2>

（5）佐渡流罪

幕府では竜の口での処刑に失敗してから大聖人への処置が定まらず、約1カ月間、大聖人は相模国の依智（現在の神奈川県厚木市北部）にある本間六郎左衛門（佐渡国の守護代）の館に留め置かれました。

結局、佐渡流罪が決まり、大聖人は、文永8年（1271年）10月10日に依智を出発し、11月1日に佐渡の塚原という墓地にある荒れ果てた三昧堂（葬儀用の堂）に入りました。そこでは、厳寒の気候に加えて、衣類や食料も乏しい中、佐渡の念仏者から命を狙われるという状態でした。

他方、弾圧は鎌倉の門下にも及び、土牢に入れられたり、追放、所領没収などの処分を受けます。そして、多数の門下が臆病と保身から大聖人の仏法に疑いを起こして退転してしまいました。

翌文永9年（1272年）1月16日、17日には、佐渡だけでなく北陸・信越等から諸宗の僧など数百人が集まり、大聖人に法論を挑んできましたが、大聖人は各宗の邪義をことごとく論破されました（塚原問答）。

2月には北条一門内部の同士打ちが起こり、鎌倉と京都で戦闘が行われました（二月騒動）。大聖人が竜の口の法難の際に予言された自界叛逆難が、わずか150日後に現実になったのです。

同年初夏、大聖人の配所は、塚原から一谷に移されましたが、念仏者たちに命を狙われるという危険な状況に変わりはありませんでした。

この佐渡流罪の間を通して、日興上人は、大聖人に常随給仕して苦難をともにされました。また、佐渡の地でも、阿仏房・千日尼夫妻をはじめ大聖人に帰依する人々が現れてきました。

大聖人は、この佐渡の地で多くの重要な御書を著されていますが、とりわけ重要な著作が開目抄と観心本尊抄です。

文永9年2月に著された開目抄は、日蓮大聖人こそが末法の衆生に対して主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かされているところから、「人本尊開頭の書」といわれます。

また文永10年（1273年）4月に著された観心本尊抄は、末法の衆生が成仏のために受持すべき南無妙法蓮華経の本尊について説き明かしており、「法本尊開頭の書」といわれます。

文永11年（1274年）2月、大聖人は赦免され、3月に佐渡を発って鎌倉へ帰られました。4月に平左衛門尉と対面した大聖人は、蒙古調伏の祈禱を邪法によって行っている幕府を強く諫めるとともに、平左衛門尉の質問に答えて、蒙古の襲来は必ず年内に起こると予言されました（第3回の国主諫暁）。

この予言の通り、同年10月に蒙古の大軍が九州を襲ったのです（文永の役）。

これで、立正安国論で示された自界叛逆難・他国侵逼難の二難の予言が二つともの中したことになります。

このように、幕府を直接に諫暁して、二難を予言的中させた御事跡は、これで3度目になります（1度目は立正安国論提出の時、2度目は竜の口の法難の時）。日蓮大聖人は「余に三度のかうみようあり」（287頁）と述べられています（三度の高名）。

（6）身延入山

3度目の諫暁も幕府が用いなかったため、日蓮大聖人は甲斐国（現在の山梨県）波木井郷

の身延山に入ることを決意されました。身延の地は、日興上人の教化によって大聖人の門下となった波木井六郎実長が地頭として治めていました。

大聖人は、文永 11 年（1274 年）5 月に身延に入られました。しかし、大聖人の身延入山は、決して隠棲などではありませんでした。

身延において大聖人は撰時抄、報恩抄をはじめ、数多くの御書を執筆されて、大聖人の仏法の重要な法門を説き示されました。特に、**三大秘法**（本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目）を明らかにされました。

さらに、法華経の講義などを通して未来の広布を担う人材の育成に全力を注がれました。また、多くの御消息文（お手紙）を書かれ、在家信徒一人ひとりの信心を激励し、各人が人生の勝利と成仏の境涯が得られるよう指導が続けられました。

（7）熱原の法難と大御本尊御建立

日蓮大聖人の身延入山後に、駿河国（現在の静岡県中央部）の富士方面では、日興上人が中心となって折伏・弘教が進められ、天台宗などの僧侶や信徒が、それまでの信仰を捨てて大聖人に帰依するようになりました。

そのために、天台宗寺院による迫害が始まり、大聖人に帰依した人々を脅迫する事件が次々に起こりました。

弘安 2 年（1279 年）9 月 21 日には、熱原の農民信徒 20 人が無実の罪を着せられて逮捕され、鎌倉に連行されました。農民信徒は平左衛門尉の私邸で拷問に等しい取り調べを受け、法華経の信心を捨てるよう脅されましたが、全員がそれに屈せず、信仰を貫き通しました。

そして、神四郎・弥五郎・弥六郎の 3 人の兄弟が処刑され、残りの 17 人は居住する地域から追放されました（10 月 15 日、一説には翌年 4 月 8 日）。この弾圧を中心とする一連の法難を「**熱原の法難**」といいます。

農民信徒たちの不惜身命の姿に、大聖人は、民衆が大難に耐える強き信心を確立したことを感じられて、10 月 1 日に著された聖人御難事で立宗以来、「二十七年」目にして、「**出世の本懐**」を遂げられたと宣言されました。「出世の本懐」とは、仏がこの世に出現した目的という意味です。

そして、**弘安 2 年（1279 年）10 月 12 日に一閻浮提総与の大御本尊**を建立されたのです（一閻浮提総与とは全世界の人々に授与するとの意）。

熱原の法難における、民衆の強き信心に呼応して御図顕された弘安 2 年の大御本尊は、全民衆救済という日蓮大聖人の大願を込めて、広宣流布のために顕されたのです。

また、この法難においては、大聖人門下が異体同心で戦いました。特に、21 歳の青年・**南条時光**は同志を守るなど活躍しました。

(8) 日興上人への付嘱と御入滅

弘安4年(1281年)11月、身延に大坊が完成し、久遠寺と名づけられました。

弘安5年(1282年)9月、大聖人は御一代に説き弘められた法門のすべてを日興上人に付嘱し、広宣流布の使命と責任を託されました(身延相承)。

9月8日、大聖人は、弟子たちの勧めで常陸国(現在の茨城県北部と福島県南東部)へ湯治に行くため、9年間住まわれた身延山を発ちました。そして、武蔵国池上(現在の東京都大田区)にある池上宗仲の屋敷に滞在し、後事について明確に定められたのです。

9月25日には、病を押して、門下に対し、立正安国論を講義されました。

弘安5年(1282年)10月13日、大聖人は御入滅に先立って再び日興上人へ付嘱され、日興上人を身延山久遠寺の別当(住職)と定められました(池上相承)。

同日、日蓮大聖人は、池上宗仲邸で61歳の尊い生涯を終えられたのです。

(大白蓮華07年10月号74頁~80頁)

【第3部 池田SGI会長講義 希望の経典『御書』に学ぶ】

第5回 顕仏未来記

【御文】

法華経の第七に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云々



天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」等云々広宣流布の時を指すか、伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云々末法の始を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれば竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るなり（御書 505 鈔）

未来記——後世の門下への遺命

題号の「顕仏未来記」（仏の未来記を顕す）とは、「未来を予見し、記した仏の言葉を実現する」という意味です。

「仏の未来記」とは一往は釈尊の未来記を指しますが、本抄の元意は、末法の御本仏としての「日蓮大聖人の未来記」を明かされることにあります。

釈尊の未来記とは、本抄冒頭に引用されている法華経薬王品の経文です。釈尊の滅後の悪世、とりわけ末法においては、あらゆる魔性の跳梁と戦い、全世界への法華経広宣流布を断絶させてはならないとの仏意・仏勅が示されています。

本抄では、この釈尊の未来記を現実のものとしたのは、大聖人ただお一人であることが示されています。

そのうえで、大聖人御自身の未来記として、法華経の肝要である南無妙法蓮華経の大法が世界中に流布することが明かされていきます。

本抄は文永10年（1273年）閏5月、流罪の地・佐渡の一谷で執筆されました。

本抄には、特定の対告衆が存在しません。それは、現在と未来の全門下に与えられた御遺命とも拝される重書であることを示しているのではないのでしょうか。

同じく佐渡で著された「開目抄」「観心本尊抄」には、人・法の本尊をめぐる

法門が明かされています。本抄は、この深義を踏まえ、宇宙根源の妙法と一体の尊極の生命を万人に開いていく日蓮大聖人の仏法こそが、末法の全世界の人々を救いうる大法であることが示されていきます。

末法に生まれ合わせた喜び

本抄の冒頭では、末法に生まれたがゆえに、法華経を説いた釈尊にも、正法・像法時代に法華経を弘めた天台・伝教等とも巡り合うことができないのは、実に嘆かわしいことであると言われてしています。

釈尊の在世から遠く隔てられた末法の時代は、衆生を教化する師たる釈尊の影響力が薄れ、残された教えも形骸化し、仏教全体の救済力が弱まっていく時代です。

本抄では、末法は形だけは釈尊の教えが残っているが、実践も実証もなくなってくる時代であると、末法の本質を示されています。

このような仏教の衰えとともに、人々の生命力も衰え、時代全体も濁ってしまう。したがって、末法は、法の上からも、次代相の上からも、嘆くべき時代であると、当時の人々は受け止めていたのです。

しかし、大聖人は一転して、実は末法に生まれることは喜ばしいことなのだと言います。それは、この薬王品に説かれた釈尊の一閻浮提広宣流布の遺命を実現すべき時代こそが、「後の五百歳」とあるように、まさに末法であるからです。

更に、傍証として、末法に生まれることを願い求める天台・伝教の言葉を引かれています。

一見すると、末法は行き詰まりの時代です。しかし、大聖人は法の上から、むしろ末法は真実の法が広まる喜ぶべき時代であると言われてしているのです。

(大白蓮華 08年1月号)

第6回 妙一尼御前御消息

【御文】

法華経を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華経を信ずる人の凡夫となる事を、経文には「若有聞法者無一不成仏」ととかれて候（御書 1253 頁）

試練の冬が勝利の花を

ここで大事なのは、冬があるから春の喜びがある、ということです。「冬のごとき信心の戦い」があつてこそ「勝利の春」が開かれるのです。

たとえば、春に咲く桜の花——。

つぼみのもとである「花芽」は、夏までに形成され、秋には、いったん「休眠」状態に入ります。この「花芽」が眠りから覚め、開花へ向けて本格的に生長を開始するには、冬の寒さに、さらされなければならない。

これを「休眠打破」と言います。冬の低温が刺激となり、「花芽」の生長を促すのです。そして眠りから覚めた「花芽」は、早春の気温上昇とともに、さらに膨らみ、やがて開花していくのです。

「冬」には、もともと持っていた力、眠っていた可能性を目覚めさせる働きがある——人生も仏道修行も、原理は同じです。

衆生の生命は「仏性」という「仏の種」をはらんでいます。宇宙大の広がり
と可能性を秘めたその種を「休眠打破」するものこそ、冬のごとき法華經の信心——すなわち、仏道修行の途上に競い起こる「難」との戦いです。「三障四魔」「三類の強敵」との戦いです。

正しき法に則って、試練の冬に耐え、戦い抜いてこそ、勝利の花を爛漫と開かせることができるのです。

逆に、冬の大変な時に、信心の向上のための戦いを避けたり、信心を疑って退いたりしてしまえば、すべてが中途半端となってしまふ。桜も「休眠打破」の時期が不十分であれば、開花が遅れ、花が不揃いになるといいます。冬の間
にこそ、どう戦い、どれほど充実した時を過ごすか。必ず来る春を確信し、どう深く生きるか——そこに勝利の要諦がある。

法華經の信心は「冬」のようなものです。その厳しい宿命転換の戦いがあつて初めて「春」を到来させ、福運を築くことができる。ゆえに試練の冬を避けてはならない。鍛錬の冬に挑戦しゆく勇気があれば、私たちは、成仏という「偉大な春」へ、広宣流布という「最高の春」へと、無限に前進していくことができます。

「法華經は冬の信心なり！」

そして「冬は必ず春となる！」

この「冬から春へ！」の実践を、たゆみなく繰り返し、持続していくことが、人生を最も充実させ向上させていく根本の軌道となる。

この生命の軌道を力強く進めてゆくなかに一生成仏の道が開け、無量の福運に輝く「春爛漫の大境涯」を、三世永遠に満喫していくことができるのです。

(大白蓮華 08年2月号)

第10回 三沢抄

「一人立つ」 勇気の継承

【御文】

説い末代の凡夫・一代聖教の御心をさとり・摩訶止観と申す大事の御文の心を心えて仏になるべきになり候いぬれば・第六天の魔王・此の事を見て驚きて云く、あらあさましや此の者此の国に跡を止ならば・かれが我が身の生死をいづるかは・さてをきぬ・又人を導くべし、又此の国土ををさへとりて我が土を浄土となす、いかんがせんとして欲・色・無色の三界の一切の眷属をもよをし仰せ下して云く、各各ののうのうに随つて・かの行者をなやましてみよ・それに・かなわずば・かれが弟子だんな並に国土の人の心の内に入りかわりて・あるひはいさめ或はをどしてみよ・それに叶はずば我みづから・うちくだりて国主の身心に入りかわりて・をどして見むに・いかでか・とどめざるべきとせんぎし候なり。

日蓮さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代の凡夫の今生に仏になる事は大事にて候いけり（御書 1487 ㊦）

元品の無明が第六天の魔王に

大聖人は「元品の無明は第六天の魔王と顕われたり」（997 ㊦）と仰せです。

「元品の無明」とは、わが生命が妙法の当体であることへの無知であり、そしてまた、すべての生命が妙法の当体であることへの無知です。さらには、宇宙全体が妙法の当体であることへの無知であるということもできます。

この根源的な無知は、様々な不幸をもたらす種々の迷いの根本であり、また、あらゆる悪の働きを生む暗い衝動となって現れる。最も認識しがたい迷いであり、正体不明であるがゆえに、知らないうちに、私たちの生命において悪の力を持つようになる。また、あらゆる生命に具わるものであるがゆえに、自他の生命に暗い衝動を現します。

このように最も見分けがたく、しかも、あらゆる生命を悪の力で自在に操る強力な魔性であるゆえに、「他化自在天子魔」といい、「魔王」というのです。

しかし、この元品の無明は、強力な悪の力を持っているとはいえ、その正体は、結局は「無知」であるがゆえに、「智慧」によって必ず打ち砕くことができ

るのです。

その智慧をあらわした人が「仏」です。

その最極の智慧を教える法が「正法」です。

釈尊の法華経や日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経が、この「正法」の意義を持つことは言うまでもありません。

私たちは、この正法を信ずる「信」をもって仏の「智慧」に代え、凡夫でありながら、元品の無明を打ち破っていくことができます。すなわち、元品の無明を破る力は、「智慧」であり、「信」であり、「心の力」に他ならないのです。

本抄では、第六天の魔王がいかに恐ろしく、いかに手強いかを、分かりやすく説かれております。そして、第六天の魔王を打ち破っていく力は「心の力」であることを、大聖人御自身の実践を通して示されています。

その中で、私たちが住む娑婆世界は、第六天の魔王が支配する領土であるとされています。これは、人間の欲望的・精神的・物質的な営みによって作り上げられた現実の社会が、元品の無明によって苦悩の流転をしているということです。

この第六天の魔王が一番、嫌がることは、何か。それは、我が領土の中に仏の勢力が拡大して、所領を奪われることです。一人の正法の行者が成仏することは、その一人にとどまらず、大勢の民衆が魔王の呪縛から解放されることになる。

そこで、第六天の魔王は一切の眷属を集めて命令します。“それぞれの力の限り、その正法の行者を悩ましてみよ”と。この魔王の眷属とは、いわゆる「十軍」のことです。すなわち、欲、憂愁、飢渴、渴愛（深く強い欠乏を満たしたいという欲求）、睡眠、怖畏（おそれ）疑悔（疑いと後悔）、瞋恚（いかり）、利養虚称（物質的な繁栄と名声）、自高蔑人（自分を高く持ち上げ他人を蔑むこと）という、元品の無明から生まれる様々な煩惱や迷いが、仏道修行を妨げる魔軍として次々と押し寄せてくるということです。

そして、正法の行者自身が、これらの魔に食い破られることがなければ、今度は、正法の行者の弟子・檀那たち、あるいはその他の国土の人々の身に入って、行者を迫害せよと魔王は命じると言われています。これは、他の人々の生命の中にある元品の無明が魔の働きを起こすことです。

釈尊の時代の提婆達多や善星比丘、あるいは阿闍世王、大聖人の時代の三位房や名越の尼らは、この魔軍に敗れたがゆえに、師敵対に墮したと言えます。日興上人の師弟不二の信心が分からなかった五老僧も、結局、大聖人に対する師敵対に陥りました。

大聖人は、三位房などが退転・叛逆していった原因は、「臆病」「慢心」「貪欲」「不信」にあると洞察されています。

彼らはまさに、自らの利養虚称や自高蔑人をはじめ、怖畏、疑悔、瞋恚などの心ゆえに、清純な信心の世界にいられなくなった。端的に言えば、信心そのものが破られてしまった。しかし自身の敗北を認めることが耐えられないゆえに、正しく実践している者に対して怨嫉し、かえって誹謗を重ねていったのです。

近年で言えば、牧口先生、戸田先生のもとを去り、あまつさえ恩師を誹謗した輩もまったく同じでした。

昭和 25 年（1950 年）頃、戸田先生の事業が一番大変な時のことです。それまで戸田先生のことを師匠と言っていた人間が一転して、「戸田君、戸田君」などと蔑み、批判していった姿を、私は目の当たりにしました。

人間は何と浅ましいことか。私は、これが無明に支配されやすい人間の世界の一つの実相であることを痛切に思い知らされました。とともに、恩師に怨みず人間とは断固、戦うことを心に固く誓いました。

人間にとって最も根幹となる師恩にさえ、違背していく。——ここに、第六天の魔王に食い破られた人間の弱さが端的に現れています。「師弟の道」を決して外れないと決意してこそ、そうした魔性の“奥の奥”まで如実知見し、喝破できるのです。

私は、師恩に報いる生き方を示し切ることを心に定め、実践し抜いてきました。その実践があったればこそ、無明を打ち破ったところに現れる生命の真の強さを、身をもって知ることができたと思っています。今日、私たちが「人間主義の宗教」を確信をもって主張し、その潮流を全世界に広げることができたのも、師弟の道を貫き、魔性との戦いを勝ち抜いてきたからであると信じます。

仏法は究極の人間学です。第六天の魔王との壮絶な精神闘争の中で、偉大な人間性を開き、確立していく「人間のための宗教」です。

さて本抄の御文に戻れば、魔王の眷属である魔軍が正法の行者を退転させることに失敗した後は、いよいよ、魔王自身が、天界から降りて国主の身に入り、正法の行者を弾圧するとされています。すなわち「権力の魔性」の発動です。

「権力の魔性」とは、何か。あらゆる生命が尊極の妙法の当体であることを否定する「元品の無明」が現す究極の悪の働きです。具体的に言えば、人間生命を見下し、悪の力を行使する手段として他者をほしいままに利用する働きであるとも言ってよい。

「権力の魔性」は、無明の発動によって形成された現実世界に瀰漫する魔性が、最も強力にあらわれた形態であると言えます。

魔王が国主の「身に入る」ということは、元品の無明の悪の働きが国主の生命の中心に座ると言うことです。そして、国主を中心にして成っているその社会の力が、すべて無明の迷妄と悪の働きに基づいて稼動するようになるという

ことです。要するに、「狂った生命」で社会が動いていくということです。大聖人は、これを「悪鬼入其身」と断じられ、「鬼神乱る」と言われたのです。

(大白蓮華 08 年 7 月号)

【第 4 部 創価スピリット 日蓮宗を破す】

創価学会の歴史

創価学会初代会長牧口常三郎先生は、教育の実践を重ね、人生の根本となる真実の宗教を求めていくなかで、1928 年（昭和 3 年）、日蓮大聖人の仏法と出会い、大聖人の仏法を継承した日興上人の流れをくむ日蓮正宗に入信しました。牧口先生を師と仰ぐ戸田城聖先生も、この年、牧口先生に従って日蓮大聖人の仏法に帰依します。

1930 年（昭和 5 年）11 月 18 日、牧口先生と戸田先生によって、創価教育学会が創立されました。日蓮正宗の在家信徒団体ですが、会の運営も会員の信心指導も僧侶に依存することなく学会独自に行っており、会員各自の信行の深化により個人の幸福と社会の平和と繁栄を目指す開かれたものであり、日蓮大聖人の仏法本来の実践のあり方に基づいたものでした。

1940 年代に入り、軍国主義に走る日本政府は国家神道による思想統制を図り、神社参拝や神札を祭ることを国民に強要しました。1943 年（昭和 18 年）6 月、学会は権力の弾圧を恐れた宗門から「神札を受けるように」と言い渡されました。これに対して、学会は日蓮大聖人が示された謗法厳誡の教えを貫き、神札の受け取りを拒否しました。

同年 7 月 6 日、牧口先生は伊豆・下田で、戸田先生は東京で逮捕され 2 人とも投獄されたのです。そして、牧口先生は 1944 年（昭和 19 年）11 月 18 日、老衰と栄養失調のために東京拘置所内で逝去しました。1945 年 7 月 3 日、2 年の獄中生活を耐え抜いて出獄した戸田先生は、ただ一人立ち上がり、壊滅状態だった学会の再建に着手します。

戸田第 2 代会長を全面的に支え、念願の 75 万世帯達成の原動力となったのが池田 S G I 会長でした。1960 年 5 月、恩師・戸田先生の後継として第 3 代会長に就任した池田先生は、国内ばかりか世界に広く大聖人の仏法を広め、世界宗教としての堅固な基盤を築いていきました。

それとともに、宗門の外護に努め、350 を越す寺院の寄進、総本山大石寺の整備、さらに 800 万信徒の真心の御供養により本門事の戒壇たるべき正本堂の建立を推進するなど筆舌に尽くせない貢献をしました。この正本堂も、後に日顕によって破壊されたのです。

大聖人の御遺命である世界広宣流布を推進する創価学会に対し、日蓮正宗宗門は儀式、形式にこだわり、僧侶の権威をかざして学会の大前進、池田先生の世界的な活躍、顕彰に嫉妬心をつのらせていき、あげくは 1990 年（平成 2 年）12 月、突然、池田先生の総講頭を罷免し、さらに翌年 11 月、創価学会 1000 万信徒を「破門」するという暴挙に出たのです。（宗門事件）

しかし、学会は宗祖大聖人に違背した宗門の大謗法を責め抜き、宗門事件に大勝利し、日本のみならず世界 192 ヲ国・地域で S G I メンバーが喜々として大聖人の仏法を実践しているのです。

（大白蓮華 07 年 10 月号 107 頁「創価学会の歴史」から抜粋・編集）

日顕宗を破す

ここでは、広宣流布を妨害しようとする魔性を現した日顕宗（法主を絶対として、前法主の日顕が支配してきた現在の日蓮正宗宗門のこと）の邪義と破折を学びます。

宗門事件の経過

創価学会は創立以来、日蓮正宗宗門の外護に努めてきました。戦後、宗門が経済的に疲弊していた時から宗門を守り、350 以上もの寺院を建立して宗門に寄進してきたのです。

広布の大願に生きる創価学会と、僧侶の権威を保とうとする宗門との間には時に摩擦が生ずることもありましたが、学会は僧俗和合を願って事態の收拾に努力し、乗り越えてきました。昭和 50 年代前半（1970 年代後半）には、宗門の一部僧侶らによる理不尽な学会攻撃と檀徒づくりが表面化しましたが、この時にも学会の誠実な対応で事態が收拾されました。

しかし、平成 2 年（1990 年）、法主日顕は信徒蔑視の体質をあらわにし、学会を切り捨てて会員信徒を宗門に隷属させるために、「創価学会分離作戦」（C

作戦) という陰謀を企て、実行に移したのです。すなわち、同年 12 月、宗門は宗規を一方的に変更し、池田名誉会長をはじめ学会幹部に対し、それまで信徒の指導を託して任命してきた法華構総講頭・大講頭の役職の罷免を通告してきました。学会は話し合いによる解決を求めましたが、宗門は話し合いを拒否。学会員に対して御本尊の授与を停止し、平成 3 年 (1991 年) 11 月には一方的に学会を「破門」するという暴挙に出たのです。

学会は、平成 5 年 (1993 年) に日寛上人書写の御本尊を御形木御本尊として全世界の会員に授与していくことを決定。日蓮大聖人直結の広宣流布の教団として前進していくことになりました。

それ以来、創価学会が年々、全世界で隆盛しているのに対し、宗門は衰退の一途をたどっており、その正邪は事実の上でますます明らかになっています。

平成 17 年 (2005 年) 12 月、日顕は退座しましたが、天魔・日顕の毒に染められた宗門の濁流は元には戻りません。誰が法主を継ごうが、日顕宗は日顕宗であり、完全に日蓮大聖人の仏法に違背した邪教と化したのです。

日顕宗の大罪と邪義

① 広布破壊の策謀

平成 3 年 (1991 年) 11 月、宗門は学会に「破門通告書」を送ってきました。そこには御書の引用もなく、学会を破門する教義上の根拠も全く示されていませんでした。単に“学会が宗門に服従しないから”という権威的・感情的な主張が繰り返されていたに過ぎません。

「大願とは法華弘通なり」(736 巻)、 「広宣流布の大願」(1337 巻) と仰せのように、広宣流布は日蓮大聖人の御遺命です。だからこそ、創価学会は、創立以来、広宣流布を目指して折伏・弘教の実践に努め、日本のみならず全世界に大聖人の仏法を弘通してきたのです。

その創価学会の破壊を企てるということは広宣流布破壊の大謗法であり、一切衆生の救済を目指された日蓮大聖人のお心に背く大罪です。

② 法主信仰の邪義

日顕宗が終始、主張しているのは“法主は絶対であるから、とにかく法主に従え”という「法主絶対論」「法主信仰」です。

法主が絶対であるなどという教義は、大聖人の御書にも日興上人の御教示に

も一切なく、完全に大聖人の教えから逸脱した「邪義」です。

日興上人は日興遺誠置文で「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構え
ば之を用う可からざる事」(1618 鈔)と、仏法に背いた法主を用いてはなら
ないと戒められています。この戒め自体が法主絶対論を否定しています。

③ 誤った血脈観

日顕宗では前の法主から相承を受けるだけで仏の内証の悟り、法体が、次の
法主に伝えられるという神秘的な血脈観を主張しています。

しかし、このような血脈観も日蓮大聖人や日興上人の教えとは全く関係のな
い「邪義」に過ぎません。

大聖人が生死一大事血脈抄で「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に
成る血脈を継がしめん」(1337 鈔)と仰せのように、本来、血脈とは万人に開
かれたものであり、一部の人だけが独占するものではありません。

同抄で「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」(1338 鈔)と仰せ
のように、血脈の本質は信心であり、血脈とは正しい信心の異名にほかなりま
せん。

日顕宗のように大聖人に違背しているものは信心の血脈をなくしたものであ
り、たとえ御本尊を拝しても功德が現れることはないのです。

④ 化儀の悪用

日顕宗の大罪の一つとして、葬儀、法要、戒名、塔婆などの化儀を悪用し、
仏法を金儲けの道具にしてきたことが挙げられます。

現在、宗門が行っているような僧侶による葬儀、法要、戒名などの化儀は、
大聖人御自身が定められたものではなく、後の時代に作られたものに過ぎませ
ん。宗門は僧侶による葬儀が成仏のために不可欠であるなどと主張していますが、
そのようなことを大聖人は一切言われていません。

むしろ、「過去の慈父尊霊は存生に南無妙法蓮華経と唱へしかば即身成仏の人
なり」(1423 鈔)等と仰せのように、各人の成仏は生前の信心・実践によるこ
とを強調されています。大聖人の御教示を無視して、僧侶による葬儀が成仏の
ために不可欠である、などと言うこと自体、大聖人の仏法を歪める大罪となる
のです。

⑤ 僧俗差別

日顕宗は、“僧侶が上で在家は下”“僧侶が師で在家は弟子”などと主張し、

僧侶と在家を露骨に差別しています。

しかし、日蓮大聖人、日興上人は“僧侶だから師匠、在家だから弟子”などという固定的な関係を言われたことはありません。

むしろ、「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華經を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」(1134 鈔)と僧俗平等こそ本来の僧俗関係であることを示されています。

日顕宗が僧俗を差別していることは、一切衆生を平等に救済することを目指した仏教の本質を見失ったものといえます。

⑥ 腐敗墮落

大聖人は僧侶の在り方について「但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ」(1056 鈔)と、質素な振る舞いであるべきことを示されています。

しかし、日顕をはじめ日顕宗の悪僧の実態は腐敗墮落を極め、大聖人の御教示とは全く逆のものになっています。

日顕が高級温泉旅館での豪遊を繰り返していたことは有名ですが、末寺住職なども同様です。まさに日顕宗は仏法を「食いもの」にする存在になっているのです。

大聖人は、こうした仏法利用の悪僧について「法師の皮を著たる畜生」(1386 鈔)、「食法がき〈餓鬼〉」(1111 鈔)と厳しく破折されています。



また大聖人は、「法華經の敵」「仏の敵」を徹して責め抜けと、繰り返し教えられています。

「いかなる大善をつくり法華經を千万部読み書写し一念三千の觀道を得たる人なりとも法華經の敵をだにも・せめざれば得道ありがたし」(1494 鈔)とある通り、「法華經の敵」を責めなければ成仏は叶わないとまで仰せなのです。

仏法を破壊しようとする者との戦い、呵責していくことは仏法者としての最大の責務です。

仏法破壊の大悪を放置していることは、結果として、その悪行に手を貸す大罪となるからです。また、悪を打ち破っていく戦い自体が、個人の成仏の境涯を開く実践となるのです。

私たちは、日顕宗の悪を断固、打ち破り、更に世界広布の大きな流れを開いていきましょう。

(大白蓮華 07 年 10 月号 116 鈔～118 鈔)

「2009 年度教学レビュー」教材・学習の要点

「2009 年度教学レビュー」の各教材から「学習の要点」を以下にまとめました。「教学レビュー」の問題は、主としてこれらの学習の要点に基づいて出題されますが、質問の内容は、年月日や名前などの暗記を求めるものでなく、法理の理解度に重点を置くものとなります。（「学習の要点」の英文は、パンフレット“SGI-USA Buddhist Learning Review”を参照。ウェブサイト www.sgi-usa.org でもご覧になれます）

【第 1 部 基礎仏法用語】（座談会の御書から）

（1）信行学

＜諸法実相抄＞

行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし（御書 1361 ㊦）

- ◆ 「学」とは、大聖人の御書を根本に仏法の法理を学んでいくことです。
- ◆ いかに外形が立派な寺院などの建物があったとしても、行学の実践がないところには、もはや仏法は存在していません。
- ◆ 大聖人の教え通り、どんなことがあっても信行学を貫き、広宣流布に進んでいくことが真の仏法者のあり方です。それこそ日蓮仏法の真髓なのです。
- ◆ SGI は、各人の成長と幸福のため、そして広宣流布のために手を携え、激励し合って前進する団体であり、まさに法華経の精神そのものと言えます。

（2）三証

＜三三蔵祈雨事＞

日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず（御書 1468 ㊦）

- ◆ 「文証」とは、その宗派の教義や主張が経文、仏典のうえで裏付けをもっているかどうかということです。「理証」とは、その宗派の教義や主張が道理にかなっているかどうかということです。「現証」とは、その宗派の教義や主張通りの結果が、生活や社会に現れるかどうかということです。
- ◆ 宗教とは本来、単に観念的・内面的なものではなく、善かれ悪しかれ、人々の生活・人生や、社会の在り方に重大な影響を及ぼすものです。その現実の結果が、宗教の勝劣浅深を判断していく基準となります。
- ◆ 大聖人は「開目抄」で「文無く義無きは信受すべからず」（御書 219 頁）との天台大師の言葉を引かれ、文証も理証もない教義を信じてはならないと戒められています。
- ◆ この一節で仰せのように、文証、理証以上に現証が重要であるとされています。それは本来、現実の人間を苦悩から救うため、つまり成仏が仏法の目的であるからです。
- ◆ 大聖人御自身の振舞いや御書、また池田 SGI 会長の多くの著作や平和への功績、そして世界幾百万の SGI メンバーによる功德の実証は、誰人も否定できない文証・理証であり、妙法の功力を示す現証に他なりません。

（3）相対的幸福と絶対的幸福

＜衆生所遊樂御書＞

一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に云く「衆生所遊樂」云云、此の文・あに自受法樂にあらずや（御書 1143 頁）

- ◆ 信心の目的は、いかなる時にあっても感謝の思いに満ち、勇敢に胸を張って、幸せに生きていくためです。
- ◆ 大聖人は、苦しみは人生の一部であるとしながらも、妙法を持ち、弘教する努力のなかに、「自受法樂」という偉大な境涯を得ることを教えられています。
- ◆ 幸福とは外界の状況や他の人によって決まるのではなく、ひとえに自分自身の努力と自覚によるのであると言われたのです。ある欲望を満たすことによって得られる「相対的幸福」は、妙法の実践から達成される深い生命境涯とは到底比べることはできません。
- ◆ 池田 SGI 会長はこう述べています。「他人や環境に引きずられて幸・不幸を感ずる生き方は、法華經ではありません。真実の幸福境涯ではありません。自分の悩みを、人のせいにし、環境のせいにする。そういう『く

せ』を直せば、そこから大きく境涯が開くのです」

- ◆ 苦悩も喜びもともに自己の存在意義を深く理解するために必要なのです。何があっても題目を唱えつつ、自他の幸せのために前進していく時、一生成仏への偉大な因を積み重ねていくことは間違いありません。

(4) 第六天の魔王

<三沢抄>

生死をいで仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし (御書 1487 鈔)

- ◆ 妙法を修行する者には、必ず「三障四魔」という成仏を妨げる働きが現われてきます。三障四魔のうちでも「第六天の魔王」が最も強力であるとされます。
- ◆ 「第六天の魔王」とは、別名、「他化自在天」とも言われます。したがって、第六天の魔王とは、自分の思うがままに人々を自在に操ろうとする、権力者の生命に巣食う破壊的な傾向性であるとも言えます。
- ◆ 仏界の生命である「元品の法性」が存在しますが、それを信じられないのも凡夫の常です。この「元品の法性」への不信を「元品の無明」と呼ぶのです。この無明こそ、あらゆる人間の苦悩の根源なのです。
- ◆ 生命内奥に巣食う魔の働きを対治することは、仏法の根本命題であったと言えます。
- ◆ 魔に負けてしまえば、内奥の無知に支配されることになり、自他とも生命の偉大な可能性、成仏の可能性を否定してしまうことになります。

【第2部 日蓮大聖人の御生涯】

<パート1>

- ◆ 日蓮大聖人は、貞応元年(1222年)2月16日、安房国長狭郡東条郷の片海(現在の千葉県鴨川市小湊)という漁村で誕生されました。漁業で生計を立てる庶民階層の出身でした。
- ◆ 大聖人は鎌倉・京都・奈良等の各地の諸大寺を巡る遊学を開始し、一切経を精読するとともに、各宗派の教義の本質を検証していかれました。
- ◆ 建長5年(1253年)4月28日の「午の時」(正午ごろ)、清澄寺で、念仏などを破折するとともに、南無妙法蓮華経の題目を高らかに唱え

て末法の民衆を救済する唯一の正法を宣言されました。これが「立宗宣言」です。

- ◆ 大聖人は立正安国論を著され、文応元年（1260年）7月16日、時の実質的な最高権力者であった北条時頼に提出されました。これが大聖人による最初の国主諫暁です。
- ◆ 文永8年、(1271年)9月12日、平左衛門尉が武装した兵士を率いて松葉ヶ谷の草庵を襲い、大聖人は謀叛人のような扱いを受けて捕らえられました。
- ◆ 大聖人は、何も取り調べがないまま、夜半に鎌倉のはずれにある竜の口に連行されました。平左衛門尉らが、内々で大聖人を斬首することを謀っていたのです。しかし、まさに刑が執行されようとしたそのとき、突然、江ノ島の方から“まり”のような大きな光ものが夜空を北西の方向へと走りました。兵士たちはこれに怖じ恐れて、刑の執行は不可能となりました（竜の口の法難）。
- ◆ この発迹頭本以後、大聖人は末法の御本仏としてのお振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として尊敬し、帰依していきべき曼荼羅御本尊を御図頭されていきました。

<パート2>

- ◆ 竜の口での処刑に失敗したあと大聖人は佐渡流罪が決まり、文永8年（1271年）10月10日に依智を出発し、11月1日に佐渡の塚原という墓地にある荒れ果てた三昧堂に入りました。そこでは、厳寒の気候に加えて、衣類や食料も乏しい中、佐渡の念仏者から命を狙われるという状態でした。
- ◆ 翌文永9年（1272年）1月16日、17日には、佐渡だけでなく北陸・信越等から諸宗の僧など数百人が集まり、大聖人に法論を挑んできましたが、大聖人は各宗の邪義をことごとく論破されました（塚原問答）。
- ◆ この佐渡流罪の間を通して、日興上人は、大聖人に常随給仕して苦難をともにされました。また、佐渡の地でも、阿仏房・千日尼夫妻をはじめ大聖人に帰依する人々が現れてきました。
- ◆ 大聖人は、この佐渡の地で多くの重要な御書を著されていますが、とりわけ重要な著作が開目抄と観心本尊抄です。
- ◆ 文永11年（1274年）2月、大聖人は赦免され、5月に身延に入られました。しかし、大聖人の身延入山は、決して隠棲などではありませんでした。身延において大聖人は撰時抄、報恩抄をはじめ、数多くの御書を執筆されて、大聖人の仏法の重要な法門を説き示されました。

- ◆ 日蓮大聖人の身延入山後に、駿河国（現在の静岡県中央部）の富士方面では、日興上人が中心となって折伏・弘教が進められ、天台宗などの僧侶や信徒が、それまでの信仰を捨てて大聖人に帰依するようになりました。そのために、天台宗寺院による迫害が始まり、大聖人に帰依した人々を脅迫する事件が次々に起こりました。
- ◆ 弘安2年（1279年）9月21日には、熱原の農民信徒20人が無実の罪を着せられて逮捕され、鎌倉に連行されました。農民信徒は平左衛門尉の私邸で拷問に等しい取り調べを受け、法華経の信心を捨てるよう脅されましたが、全員がそれに屈せず、信仰を貫き通しました。
- ◆ そして、神四郎・弥五郎・弥六郎の3人の兄弟が処刑され、残りの17人は居住する地域から追放されました（10月15日、一説には翌年4月8日）。この弾圧を中心とする一連の法難を「熱原の法難」といいます。
- ◆ 弘安5年（1282年）10月13日、大聖人は御入滅に先立って再び日興上人へ付嘱され、日興上人を身延山久遠寺の別当（住職）と定められました（池上相承）。同日、日蓮大聖人は、池上宗仲邸で61歳の尊い生涯を終えられたのです。

【第3部 池田SGI会長講義 希望の経典『御書』に学ぶ】

第5回「顕仏未来記」（大白蓮華2008年1月号）

法華経の第七に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云……天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」等云云広宣流布の時を指すか、伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云末法の始を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれば竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るるなり。

（御書 505～506 頁）

未来記——後世の門下への遺命

- ◆ 「仏の未来記」とは一往は釈尊の未来記を指すが、本抄の元意は、末法の御本仏としての「日蓮大聖人の未来記」を明かされることにある。

- ◆ 法華經藥王品の經文には、釈尊の滅後の悪世、とりわけ末法においては、あらゆる魔性の跳梁と戦い、全世界への法華經広宣流布を断絶させてはならないとの仏意・仏勅が示されている。
- ◆ 本抄では、この釈尊の未来記を現実のものとしたのは、大聖人ただお一人であることが示されている。そのうえで、大聖人御自身の未来記として、法華經の肝要である南無妙法蓮華經の大法が世界中に流布することが明かされている。
- ◆ 本抄は、宇宙根源の妙法と一体の尊極の生命を万人に開いていく日蓮大聖人の仏法こそが、末法の全世界の人々を救いうる大法であることが示されていく。

末法に生まれ合わせた喜び

- ◆ 本抄の冒頭では、末法に生まれたがゆえに、法華經を説いた釈尊にも、正法・像法時代に法華經を弘めた天台・伝教等とも巡り合うことができないのは、実に嘆かわしいことであると言われている。
- ◆ しかし、大聖人は一転して、実は末法に生まれることは喜ばしいことである。それは、この藥王品に説かれた釈尊の一閻浮提広宣流布の遺命を実現すべき時代こそが、「後の五百歳」とあるように、まさに末法であるからだと言われている。

第6回 「妙一尼御前御消息」(大白蓮華 2008年2月号)

法華經を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華經を信ずる人の凡夫となる事を、經文には「若有聞法者無一不成仏」ととかれて候。(御書 1253 鈔)

試練の冬が勝利の花を

- ◆ 試練を乗り越えてこそ、勝利の人生がある。
- ◆ いろいろな障害に挑戦するなかに一生成仏の道が開ける
- ◆ 最も厳しい鍛錬の冬に、確信をもって、広宣流布へ前進していくことが勝利の要諦である。

第10回 「三沢抄」(大白蓮華 2008年7月号)

設い末代の凡夫・一代聖教の御心をさとり・摩訶止観と申す大事の御文の心を心えて仏になるべきになり候いぬれば・第六天の魔王・此の事を見て驚きて云く、あらあさましや此の者此の国に跡を止ならば・かれが我が身の生死をいづるかは・さてをきぬ・又人を導くべし、又此の国土ををさへとりて我が土を浄土となす、いかんがせんとて欲・色・無色の三界の一切の眷属をもよをし仰せ下して云く、各各ののうのうに随つて・かの行者をなやましてみよ・それに・かなわずば・かれが弟子だんな並に国土の人の心の内に入りかわりて・あるひはいさめ或はをどしてみよ・それに叶はずば我みづから・うちくだりて国主の身心に入りかわりて・をどして見むに・いかでか・とどめざるべきとせんぎし候なり。

日蓮さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代の凡夫の今生に仏になる事は大事にて候いけり(御書 1487~1488 頁)

元品の無明が第六天の魔王に

- ◆ 元品の無明が第六天の魔王として顕れる。
- ◆ 「元品の無明」とは、わが生命が妙法の当体であることへの無知であり、そしてまた、すべての生命が妙法の当体であることへの無知です。また、あらゆる悪の働きを生む暗い衝動となって現れる。
- ◆ 最も見分けがたく、しかも、あらゆる生命を悪の力で自在に操る強力な魔性であるゆえに、「他化自在天子魔」といい、「魔王」という
- ◆ 元品の無明は、釈尊の法華経や日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経という正法を信ずる「信」をもって仏の「智慧」に代え、元品の無明を打ち破っていくことができる。
- ◆ 第六天の魔王が一番、嫌がることは、正法を信ずる仏の勢力が拡大して、魔王の呪縛から解き放たれることである。
- ◆ 「師弟の道」を決して外れないと決意してこそ、そうした魔性の“奥の奥”まで如実知見し、喝破できる。

【第4部 創価スピリット 日蓮宗を破す】

- ◆ 1940年代に入り、軍国主義に走る日本政府は国家神道による思想統制を図り、神社参拝や神札を祭ることを国民に強要しました。1943年（昭和18年）6月、学会は権力の弾圧を恐れた宗門から「神札を受けるように」と言い渡されました。これに対して、学会は日蓮大聖人が示された謗法厳誡の教えを貫き、神札の受け取りを拒否しました。
- ◆ 同年7月6日、牧口先生は伊豆・下田で、戸田先生は東京で逮捕され2人とも投獄されたのです。そして、牧口先生は1944年（昭和19年）11月18日、老衰と栄養失調のために東京拘置所内で逝去しました。1945年7月3日、2年の獄中生活を耐え抜いて出獄した戸田先生は、ただ一人立ち上がり、壊滅状態だった学会の再建に着手します。
- ◆ 平成2年（1990年）、法主日蓮は信徒蔑視の体質をあらわにし、学会を切り捨てて会員信徒を宗門に隷属させるために、「創価学会分離作戦」（C作戦）という陰謀を企て、実行に移したのです。すなわち、同年12月、宗門は宗規を一方的に変更し、池田名誉会長をはじめ学会幹部に対し、それまで信徒の指導を託して任命してきた法華構総講頭・大講頭の役職の罷免を通告してきました。
- ◆ 学会は話し合いによる解決を求めましたが、宗門は話し合いを拒否。学会員に対して御本尊の授与を停止し、平成3年（1991年）11月には一方向的に学会を「破門」という暴挙に出たのです。

日蓮宗の大罪と邪義

- ① 広布破壊の策謀 「大願とは法華弘通なり」（736 巻）、「広宣流布の大願」（1337 巻）と仰せのように、広宣流布は日蓮大聖人の御遺命です。だからこそ、創価学会は、創立以来、広宣流布を目指して折伏・弘教の実践に努め、日本のみならず全世界に大聖人の仏法を弘通してきたのです。その創価学会の破壊を企てるということは広宣流布破壊の大謗法であり、一切衆生の救済を目指された日蓮大聖人のお心に背く大罪です。
- ② 法主信仰の邪義 日蓮宗が終始、主張しているのは“法主は絶対であるから、ともかく法主に従え”という「法主絶対論」「法主信仰」です法主が絶対であるなどという教義は、大聖人の御書にも日

興上人の御教示にも一切なく、完全に大聖人の教えから逸脱した「邪義」です。

- ③ **誤った血脈観** 日顕宗では前の法主から相承を受けるだけで仏の内証の悟り、法体が、次の法主に伝えられるという神秘的な血脈観を主張しています。しかし、このような血脈観も日蓮大聖人や日興上人の教えとは全く関係のない「邪義」に過ぎません。

大聖人が生死一大事血脈抄で「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめん」（1337 ㊦）と仰せのように、本来、血脈とは万人に開かれたものであり、一部の人だけが独占するものではありません。

- ④ **化儀の悪用** 日顕宗の大罪の一つとして、葬儀、法要、戒名、塔婆などの化儀を悪用し、仏法を金儲けの道具にしてきたことが挙げられます。現在、宗門が行っているような僧侶による葬儀、法要、戒名などの化儀は、大聖人御自身が定められたものではなく、後の時代に作られたものに過ぎません。宗門は僧侶による葬儀が成仏のために不可欠であるなどと主張していますが、そのようなことを大聖人は一切言われていません。

- ⑤ **僧俗差別** 日顕宗は、“僧侶が上で在家は下”“僧侶が師で在家は弟子”などと主張し、僧侶と在家を露骨に差別しています。しかし、日蓮大聖人、日興上人は“僧侶だから師匠、在家だから弟子”などという固定的な関係を言われたことはありません。むしろ、「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」（1134 ㊦）と僧俗平等こそ本来の僧俗関係であることを示されています。日顕宗が僧俗を差別していることは、一切衆生を平等に救済することを目指した仏教の本質を見失ったものといえます。

- ⑤ **腐敗墮落** 大聖人は僧侶の在り方について「但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ」（1056 ㊦）と、質素な振る舞いであるべきことを示されています。しかし、日顕をはじめ日顕宗の悪僧の実態は腐敗墮落を極め、大聖人の御教示とは全く逆のものになっています。

（大白蓮華 07 年 10 月号）